



1. 井伊直政陣跡(東軍)

遠江国井伊谷出身で、徳川四天王の一人。彦根藩初代藩主となる。

家康が武田氏の旧領である信濃国・甲斐国を治める際、武田家の旧臣たちを多く含んだ部隊を編成し、「井伊の赤備え」と呼ばれた。直政自身は「井伊の赤鬼」と称された。

関ヶ原本戦では、先陣は福島正則と決まっていたが、直政と松平忠吉による抜け駆けで戦闘が開始されたとも言われるが、実際は霧の中での偶発的な遭遇戦だったとの説もある。

終盤には島津義弘の追撃戦に加わり、島津軍の柏木源藤に足を撃たれて落馬。その傷がもとで、慶長7年(1602年)2月1日、彦根城築城途中の佐和山城で死去。享年42。

死因は関ヶ原で受けた傷によるものとの説もある。

※補足:松平忠吉は徳川家康の四男で、井伊直政の娘を妻にしていた。関ヶ原は初陣であった。



2. 本多忠勝陣跡(東軍)

徳川四天王の一人で、初代桑名藩主。

吉川広家ら諸大名に対し、井伊直政と連名で書状を送り、東軍に与するよう工作するなど、外交面でも活躍。本戦ではわずかな手勢ながら奮戦し、90余の首級を挙げた。

愛槍「蜻蛉切(とんぼぎり)」は、穂先に止まった蜻蛉が真っ二つになったという逸話から名が付き、「天下三名槍」の一つに数えられる。



3. 烏頭坂(島津豊久奮戦の地)(西軍)

島津四兄弟の四男・島津家久の子。父が早世したため、叔父の島津義弘(四兄弟の次男)に育てられた。義弘に恩義を感じていた豊久は、関ヶ原合戦で義弘を生還させるため、「捨て奸(すてがまり)」という戦法を用い、自らが殿(しんがり)を務めて戦死した。

その後、深手を負いながら義弘の後を追ひ、上石津の瑠璃光寺近くで亡くなったという説もある。



4. 小早川秀秋陣跡(西軍 → 東軍)

豊臣秀吉の正室・ねねの甥。

決戦前日の9月14日、1万5千の兵を率いて松尾山城に入り、伊藤盛正を追い出して陣取る。

西軍から東軍に寝返ったことで有名だが、初めから東軍側であったという説もある。

また、家康が寝返りを促すために放った「問鉄砲」は届かぬ距離であったため、後世の創作という見方もある。開戦直後に寝返ったという説も存在する。



大
善

5. 脇坂安治陣跡(西軍 → 東軍)

近江国東浅井郡出身。賤ヶ岳の七本槍の一人として知られ、明智光秀の丹波攻めでは黒井城攻めで功を挙げ、敵将・赤井直正から貂の皮の槍鞘を贈られるなど勇名を馳せた。



関ヶ原では当初西軍に属していたが、小早川秀秋の寝返りに続いて東軍に鞍替えした。

合戦後、次男・安元からの書状が家康に届いていたことや、藤堂高虎の仲介により旧領を安堵された。播磨国・龍野藩の祖であり、その子孫は明治まで藩主として続いた。

韓国ドラマでは「日本水軍第一の名将」として登場することもある。



6. 京極高知・藤堂高虎陣跡(東軍)

【京極高知】

近江国の名門・京極高吉の次男。関ヶ原では藤堂高虎と共に大谷吉継隊と交戦した。

子孫の丹後国・峰山藩京極家は、幕末まで転封されることなく続き、幕政にも深く関与した。

【藤堂高虎】

伊勢津藩初代藩主。近江出身の武士で、身長190cm超の大男とも伝えられる。

大谷隊と戦い、合戦後は外様大名ながら家康の側近として幕政で重きを成した。



7. 福島正則陣跡(東軍)

賤ヶ岳の七本槍の一人。尾張国(現・愛知県あま市または清須市)出身。

母は豊臣秀吉の母・大政所の妹であり、秀吉の甥にあたる。関ヶ原の戦いでは、宇喜多秀家軍(約17,000)と交戦。宇喜多軍の前衛8,000を率いた明石全登に押され、一時は退却を余儀なくされたが、最終的に宇喜多勢の進撃を阻止した。その後、小早川秀秋の寝返りを契機に、疲労困憊していた宇喜多軍は東軍の集中攻撃に耐えきれず、壊滅した。

大
善

8. 大谷吉継陣跡(西軍)

越前国・敦賀城主。近江国出身で、六角氏の旧臣・大谷吉房の子とされる。

石田三成とは親友で、家康との戦いは敗北を予感しつつも、三成への友情から西軍に参加。

ハンセン病を患っていたとも言われ、輿に乗って軍を指揮した。午前中は藤堂高虎・京極高知の連合軍と激戦を展開。正午ごろ、小早川秀秋らの寝返りに続き、脇坂安治、朽木元綱、小川祐忠、赤座直保らも東軍へ転じ、大谷隊は壊滅。家臣・湯浅隆貞の介錯により切腹して果てた。

大
善

9. 平塚為広陣跡(西軍)

美濃国・垂井城主。武蔵国平塚出身で三浦氏の一族。豊臣秀吉の馬廻衆。

石田三成の拳兵に際しては、大谷吉継と共に佐和山城で諫言するも受け入れられず、西軍に参加。小早川秀秋の寝返りを数度にわたり撃退したが、脇坂らの寝返りと藤堂・京極隊の攻撃により壊滅。奮戦の末、山内一豊の家臣・榎井太兵衛、または小早川軍の横田小半介に討たれたとされる。

【辞世の句】「名のために捨つる命は 惜しからじ つひにとまらぬ 浮世と思へば」
これに対し、大谷吉継の返歌

【返 歌】「契りあらば 六の巷に まてしばし おくれ先立つ ことはありとも」
が送られたと伝わるが、届いたかは不明。

大
善

10. 宇喜多秀家陣跡(西軍)

備前国・岡山城主。五大老の一人で、前田利家の四女・豪姫を妻とし、豊臣一門の一角を担った。

関ヶ原では西軍主力として約17,000人を率い、福島正則と交戦。

しかし、小早川秀秋の寝返りにより西軍は総崩れとなり、宇喜多軍も壊滅。

戦後、一度は薩摩に逃れたが、徳川・島津の和議により八丈島へ流される。その後、徳川家綱の治世に至るまで生き、関ヶ原に参加した大名としては最も長寿であり、享年84。

大
善

11. 小西行長陣跡(西軍)

肥後国・宇土城主。キリシタン大名。

和泉国堺の商人・小西隆佐の次男として京都で生まれる。

関ヶ原では田中吉政、筒井定次ら東軍と交戦し奮戦したが、大谷吉継の壊滅に続き小西軍・宇喜多軍も崩壊。伊吹山中に逃れるも、10月1日、市中引き回しの後、六条河原にて石田三成・安国寺恵瓊と共に斬首。

没後7年の1607年、イタリア・ジェノバで彼を主人公とした音楽劇が制作された。

【加藤清正との対立】

文禄の役では共に先鋒を希望し、秀吉は行長を選んだため、両者の対立が生まれた。

また、領地が接していたため境界線争いも多かった。



12. 島津義弘陣跡(西軍)

島津氏第17代当主。島津四兄弟の次男。

関ヶ原では、西軍壊滅後、約300名(あるいは1,000名)の軍勢が敵中に孤立。

義弘は伊勢街道を目指し、大軍の中を突破する「島津の退き口」と呼ばれる撤退戦を実行。

捨て奸(すてがまり)の戦法で次々と殿部隊を残しながら撤退。

生還したのはわずか80名余であった。



13. 石田三成陣跡(西軍)

近江国・石田村出身。五奉行の一人。

関ヶ原では黒田長政・細川忠興・加藤嘉明らを迎え撃ち、序盤は西軍が優勢とされた。

しかし、小早川秀秋や脇坂安治らの寝返りにより西軍は総崩れ。

三成は伊吹山中に逃れた後、春日村、新穂峠、姉川、草野谷、小谷山と転々とするも、9月21日、田中吉政の追手により捕縛された。

【島左近】

大和国出身。三成に破格の待遇で迎えられた側近。

「治部少(三成)に過ぎたるものが二つあり 島の左近と佐和山の城」

と詠まれた逸材で、合戦でも猛将ぶりを発揮した。



14. 黒田長政・竹中重門陣跡(東軍)

【黒田長政】

筑前国・福岡藩初代藩主。父は秀吉の軍師・黒田官兵衛(如水)。

幼少期、有岡城の戦いで官兵衛が拘束された際、処刑されかけたが、竹中半兵衛の機転により命を救われた。関ヶ原では、石田三成本陣との激戦の中、側面からの鉄砲隊攻撃で島左近を討ち取るなど大功を挙げた。

また、寝返り工作にも尽力し、小早川秀秋・吉川広家らの動きを主導した。

【竹中重門】

美濃国・不破郡の領主。竹中半兵衛の嫡子。

当初は西軍に属し犬山城主・石川貞清を支援したが、黒田長政の説得で東軍に転じた。



15. 細川忠興陣跡(東軍)

肥後細川家初代。明智光秀の娘・玉子(細川ガラシャ)を正室に持つ。

ガラシャは大坂の玉造屋敷で三成の人質要求を拒み、キリシタンは自殺が禁じられていたため家老の介錯により命を絶った。

関ヶ原では黒田長政と共に三成本隊と交戦し、136もの首級を挙げる戦果を挙げた。



16. 徳川家康最後陣地(東軍)

関ヶ原合戦当日、午前11時頃、苦戦する戦況に焦りを見せた家康は自ら本陣を前進させる。

小早川秀秋の寝返り後、西軍が総崩れになると、手勢を率いて石田三成本陣へ突撃。

家康自身も兜を脱ぎ、首取りの褒美として黄金十枚を与えと呼ばわり、兵の士気を鼓舞したという。